

2008年(平成20年)9月25日



吉村 和就

時、よくコロンビア大学、MIT、コーネル大学の工学系教授達が訪ねて来た。

彼らは国連の理事会や持続可能発展委員会の話題に触れる、いわば国連を最新の環境情報収集の場として捉えている。驚くのは、「こんな技術が欲しいですね」と話すと、翌週には立派な提案書が出てくる。

その提案書には、大学が保有する基本技術のみならず、開発予算

時代の変化に驚いている。9月17日、大学や企業の研究者の発表の場である日本水環境学会に招かれ、初日トップで「水環境における海外水ビジネスとその市場動向と戦略」を講演した。伝統ある水環境学会が、なぜアカデミックでない水ビジネスに注目なのか。筆者が国連本部に勤務していた

世界へのインパクトや、なぜ国連がこの研究課題を取り上げる必要があるかなど、民間企業顔負けのプレゼン内容が記載されている。国連の委託研究費は安い、彼らの熱心さの理由は、その研究成果や自分の名前が国連の機関を通じて全世界にPRされることである。米国の工学系教授は、「自分で研究費を稼がなければ、お家断絶」とは聞いていたが、「良い研

世界に響け、日本の研究

究をしても積極的にPRしない日本の教授」との次元の差を実感した。

今回、水環境学会での「水環境における国際貢献と海外ビジネス」は本部企画で、素晴らしい試みである。しかし前述のような経緯を持つ筆者にとっては、「やっと日本も目覚めたか」の感であった。

それ由、絶好の機会を与えられた筆者は研究者に語りかけた。「研

究とは細分化であり、研究者は世の中のビジネスが見えなくなると、特に日本の研究者は、穴を掘り始めると死ぬまで掘り続ける習性がある、常に原点を見直せ」今日、貴方の研究が完成し、明日から世界に売り出すとしたら、貴方は何をしますか「日本には、皆さんの研究を実証する場はない、公共事業の予算は5割減であり現状維持すらできない」、それに比べ「世界の水処理市場は6%の伸びである、金持ちにすり寄れ」世界に出て自分の研究を英文でPRせよ」そして「世界は日本の研究成果を待っている」と……。パネルディ

スカッションでも繰り返して述べた。熱心にメモを執っている研究者がたたくさんいた。これで日本は救われる。今後の国際会議で、日本の研究発表が増えることを期待している。

(グローバルウォータ・ジャパン代表)